

(十二) 手向たむけ

三千代が戻ってからは、再び軽は紀の宮殿へ姿を見せなくなった。

「三千代殿が、お上にお后様の事を讒言ざんげんしているのです。許せません。」

皇后宮大進の石田王いわたのおうきみがいきり立つ。だが紀は、日向王の妻が殺された時の

恐怖を忘れることができない。

「よしなさい。三千代は恐ろしい。」

紀の胎内には新しい命が宿っている。

「三千代を怒らせてこの子に万一のことがあったらどうします。」

后が男児を生めば、夫人の生んだ子は天皇になれない。首親王おびとのみこを擁する三

千代一派が何を仕掛けてくるかもわからない。

「お后とお腹のお子は、私が命に代えてもお守り致します。」

まだ少年の面影が残る石田は、頬を赤らめて言い切る。石田の若い真つ直ぐな正義心は、三千代に対する義憤から、紀への恋心が変わってきている。石田はこの恋を内に秘めて、心底この女人のためなら命を捨ててもよいと思っている。

皇后宮大夫の巨勢多益須こせのたやすは案じ顔で進言する。

「かと言って、お后が大宮を逃げ出すわけにもまいりますまい。ともあれ、身二つになられるまで、このことは伏せておいた方がよろしいでしょう。」

多益須の提案に若い石田は不満である。自邸に戻ると田口広麿たぐちのひろまろが来ていた。

「何と、手ぬるい。向こうがお命を狙ってくるなら、その前に向こうの命をもらおうではありませんか。」

広麿には石田も心を許している。広麿の表情が険しくなる。辺りを見回して声を潜めた。

「向こうの命とは何だ。まさか首親王ではあるまいな。」

その広麿の耳元に顔を寄せて、石田が囁く。

「赤子に何ができるといいます。三千代ですよ。全てあの女の差し金です。先手を打って三千代を討ちましょう。」

「三千代を操っているのは藤の大納言だ。」

「大納言は警護が厳しすぎます。三千代が居なくなれば、大納言もこれまでのような悪巧みはできません。」

「しかし三千代が相手では、勝っても負けても、我ら命はないぞ。」

「もとより、覚悟の上です。この命、お后に差し上げております。」

「うむ。そこまで言うなら俺の命もくれてやろう。だが、三千代を討つと言っても、我らでは後宮に入れぬぞ。」

「三千代をおびき出すのです。そのためには先ず、後宮に味方を作らねばなりません。それもなるべく三千代の身近の若い女がよいでしょう。」

「三千代の身近な女と言えば、土形娘子か。しかし、あの女が味方になるとは思えぬな。」

「むろん、色仕掛けで口説き落とすのですよ。」

春、都は若者たちの恋の季節を迎えていた。朝廷は詔まで発して男女の密会を厳しく取り締まろうとしている。石田はそれを逆手に取ろうと言うのだ。

「俺には無理だな。それに下手をすると三千代に筒抜けになるぞ。」

「やってみなければわかりませんよ。お后のためなら、私は何でもやりますよ。」

「まあ、待て。お主より俺の方が少しはましだな。よし、俺もやれるだけやってみよう。」

「吉備采女きびのうねめなんかはどうでしょう。」

「吉備采女か。あれは歌がうまい。あれを味方にするには恋歌があるな。『人麻呂』に作ってもらってはどうか。」

「それはいい。『人麻呂』の歌ならきつと靡なびいてくる。」

「では、俺も土形娘子に恋歌でも贈ってみるか。しかし、お主の腕では心許ない。もし、うまく三千代をおびき出すことができれば、刑部垂磨おとかけのたりまろを味方にしよう。あれは腕もいいし、度胸もある。信頼できる男だ。」

「先ず、女です。女を味方にできれば道は自から開けるでしょう。」

石田は山前王やまのくまのおおきみに頼んで佐留に恋歌を作ってもらった。山前王は忍壁の子である。当然佐留とも旧知の間柄である。佐留の恋歌は届けられたが、吉備采女は靡なびいてこない。

「吉備采女には男がいるらしい。」

石田は別の女を物色ものさしだした。

そうこうするうちに、紀は無事に男児を出産した。軽にはまだ何も知らせてはいない。

満月である。庭に降り立った三千代は満ち足りた思いで月に見入っていた。

天皇の乳母として絶大な権力を手に入れた。全てが思いのままだった。その

上、我が子安宿媛あすかひめが首親王おびとのみこの妻になれば、行く末永く権力の座に座り続けることができる。三千代は満月が欠けることを忘れていた。

ふと気がつくくと、月明かりの中を人目を避けるように出て行く人影。あれは誰だろう。最近男女の密会が多いとは聞いていたが。先日も取り締りの詔勅が発せられたばかりではないか。自分の侍女が禁を犯しているとあつては捨て置けぬ。我が顔に泥を塗る気か。三千代は腹が立った。自分が三野王の眼を盗んで不平等を通わせていたことなど、もうとつくに忘れてしまつてゐる。

(誰だろう。つきとめてやる。)

三千代はそつと後をつけた。

人影は宮門まで来ると、見張りの兵士に何か渡して潜りを抜けた。三千代は一瞬ためらつたが、兵士を制してそのまま後を追う。権力に酔つた女は己の力を過信している。門を出てしばらく行くと男が待つてゐる。二人は手を取り合つて歩き始めた。宮殿の外れまで来るとさすがの三千代も気味が悪い。たまりかねて声をかけた。

「待ちなさい。こんなところで何をしていますのです。」

「あつ。お乳母様。」

聞き慣れた権高な声に、土形娘子は震え上がった。

男はゆつくり振り向く。誰かがつけて来ていることはもう気づいていた。

月明かりの中に三千代の姿が浮かび上がつてゐる。暗がりの中で男の頬が心なしか笑つたように見えた。三千代は慌てた。

「これはこれは。お乳母様。このような夜更けに、お一人でいずれへ。」

密会の現場を押さえて、鬼の首でも取つたような氣でいたのに、相手は少しも恐れず近づいて来る。鳥肌が立った。

「無礼な。下がりなさい。」

恐怖の余り大声を上げた。同時に男は太刀を抜いて走り寄る。逃げようとする三千代に背中から切りつけた。

「ぎゃあああ。」

闇をつんざく悲鳴と共に血しぶきが舞う。三千代が倒れる。

「ちつ。」

急所をはずした。三千代は逃げない。呆れた女である。再び振り下ろされる太刀をかくぐると、男の足を取つた。男が倒れる。三千代の悲鳴に、宮門警護の兵士が駆けつける。なおも斬りつけるのは広麿。転げ回る三千代との間に兵士が割つて入つて、広麿を押さえつけた。

「なぜ、お乳母様を殺そうとした。誰に頼まれたのだ。」

「誰にも頼まれぬ。女と会つてゐるところを見られたから殺そうと思つただけだ。」

鞭で打たれ、水で攻められ、石を抱かされても広麿は口を割らない。背中の肉が落ち、足の骨が砕けた。広麿は舌を嚙んだ。死体がどこに捨てられたかもわからない。友の刑部垂麿は嘆く。

ももた
百足らず八十隅坂に手向けせば

過ぎにし人にけだし逢はむかも

(427)

土方娘子も鞭打たれたが、男恋しさに宮殿を抜け出しただけの女である。もとより男の企みなど知る由もない。娘子の亡骸は、初瀬の山で焼かれた。非業の死は『人麻呂』の涙を誘う。

こもりく はつせ
隠口の初瀬の山の山の際に

いさよふ雲は妹にかもあらむ

(428)

軽が紀の宮にやって来た。突然のことに侍女たちは慌てた。もう一年近く見ることのなかった軽である。紀は驚いて迎え入れた。

「子を生んだそうだな。」

「はい。皇子様でございます。」

紀は微笑んだ。誰かが知らせてくれたのだ。肩の荷が下りた思いだった。

「誰の子だ。」

紀の顔から血の気が引いた。思いもかけない言葉だった。軽の目がすわっている。身二つになるまで伏せておこうと言ったのは多益須である。多益須が近江朝の流れを汲むことを若い紀は気にも留めていなかった。

「お上のお子でございます。」

「俺はここへはずうつと来てはおらぬ。」

「前にお渡りになってからまだ一年は経っておりませぬ。」

「子を孕んだのになぜ知らせぬ。俺の子でないから、言えなかったのだろ
う。」

(呆れた。この人は何もわかっていない。)

「三千代が怖くて言えなかったのです。三千代に知れば殺されるかも知れません。三千代にとっては首親王の邪魔になるだけですから。」

「三千代がそんなことをするわけがない。」

「お上は三千代がわかっていらつしやいません。」

「わかった。三千代を殺そうとしたのはお前だな。」

「三千代を殺すって。三千代がどうかしたのですか。」

「しらばつくれるな。女狐め。成敗してくれる。」

「きやああ。」

いきなり太刀を抜いて斬りつけた。止めようとした女たちが次々に倒れた。血しぶきが飛ぶ。部屋が真っ赤に染まった。汚らわしいものを見るように唾を吐くと、軽は部屋を飛び出した。胸を突かれた紀は血まみれになって倒れている。目の前から光が消えていく。無念の涙がこぼれた。

「軽が紀を殺したのですって。」

阿閉も氷高も心の臓が止まりそうになった。

「紀を守らねば。」

これが二人の合言葉だった。三千代には気を付けていたのに。まさか、軽が直接手を下そうとは。

「三千代を殺そうとした奴がおります。放って置けば首親王も殺されます。」
軽の眼の異様な光に二人はそれ以上何も言えなかった。

「死んでしまったものは仕方ありません。私が軽を咎めれば、皆が軽を非難するようになるでしょう。天皇の権威は絶対のものでなくてはなりません。今度は眼をつぶりますがこのまま三千代をのさばらせるわけには行きません。」

阿閉の決意に氷高も同感である。

紀は皇后位を剥奪され、庶人に落とされたうえ、その亡骸は初瀬の山に捨てられた。

隠口の初瀬少女が手に巻ける

玉は乱れてありといはずやも

(424)

紀の魂を求めて初瀬の山を歩き回る男がいる。石田王である。魂の抜け殻のようにふらふらと草を分けて歩き回る。木の根に足を取られてその場に倒れた。飲まず食わずでも四五日も歩き回った。うつろな目を閉じると、もう二度と開くことはなかった。

河風の寒き初瀬を嘆きつつ

君があるくに似る人も逢へや

(425)

山前王が、死んだ石田王に代わって作った歌だという。

阿閉は秘かに紀の亡骸を探させると丁重に葬った。紀の事件に関連して、すでに亡くなっている弓削までが皇子の位を剥奪された。男女の密会は更に厳しく取り締まれるようになった。恋には歌がつき物である。歌の代作をしたというので歌人たちも次々に捕えられた。

不安が暗い影を落とす。眼には見えない『律令』という恐ろしい魔物が空一面に広がって、太陽を覆い隠そうとしているかのようでもある。国中に疫病が蔓延して死者が相継ぎ、あちこちで山火事が多発して天空を焦がした。

光を失った落日に向かって男が一人歩いている。黒く翳った大きな背中が侘しげに見える。ここは宇智の大野の北、狭嶺の山の麓。獣道を分け入ると雑木林の中に今にも潰れそうな小屋が一軒佇んでいる。小屋から漏れ出る煙と異臭に、息を止めて伊太智は入り口の筵を跳ね上げた。中には青黒い煙が

充滿している。込み上げる吐き気を抑えてひりひり痛む眼を凝らす。煙の中に黒い塊が横たわっている。

伊太智は大きく息を吸い込むと、渦巻く煙の中に飛び込んだ。炉の上で鍋がぐらぐら煮えたぎっている。黒い塊を抱き上げると急いで小屋の外へ跳びだした。腕の中の塊はもはや伊太智の呼びかけに応えることもない。その塊の余りの軽さに、伊太智の胸は軽い痛みを覚えた。

（どうした。元気がないではないか。奴らはどんどん死んでいく。お前の望みどおりになっているというのに、ずいぶん苦い顔をしているではないか。）物言わぬ塊が、伊太智を小馬鹿にするように笑っている。

伊太智がこの百済人に出会ったのはまだ子供の頃だった。百済が唐に滅ぼされた後、師と共に倭国に逃げて来たと言う。兄弟子の讒言で薬師になれなかったこの百済人は、それ以来誰に請われるともなく毒薬を作り続けてきた。（異国の地で何を思つて毒薬を作つていたのだろうか。国が滅びなければ別の生き方もあつたらうに。そして・・・俺は何のために人を殺しているのだろうか。）

不比等に利用されているだけだということは初めからわかっている。不合理な宿命を押し付けた己が一族を、望みどおり次から次へと闇に葬つているというのに、伊太智の心は一向に弾まない。むしろ、空しさと悲しさに苦しんでいると言つてもよい。

いつの間にか辺りは夜の帳よるばに包まれてしまった。

「うおおおつ。」

嘆きと怒りを交ぜにしたような、名状しがたい衝動に突き上げられて、伊太智は動かない塊を再び抱え上げると、赤く燃え盛る炎の上に放り投げた。炉の上の鍋がひっくり返つてこぼれた液体が燃え上がった。青白い炎がみるみる小屋をなめ尽くす。炎は枯葉に覆われた雑木林を焼き尽くすと、乾ききつた狭嶺の山一帯を延々と焼き続けた。

身近な人々の相次ぐ非業の死に佐留の心は打ちひしがれていた。家にじつとしていられなくて、むやみやたらと歩き回つた。都も少し外れまで来ると、道端に朽ちかけた屍が異臭を放っている。

草枕旅やどりの宿たに誰つまが夫か

国忘れたる家待たまくに

(426)

山も川も、もはや詩人の心を慰めることはできない。

飛鳥川の土手の上に腰を下ろした佐留は、溜め息をつこうとして、息を呑んだ。悲しみに曇つた目の前にあの男がいる。あんなに探したのに。今頃出て来ても遅すぎる。佐留は音を忍ばせて木陰に隠れると、男の様子を窺つた。体も衣も煤だらけ。所々焦っているのは火事場からでも出て来たのか。年は

四十前後か。大津の事件からもう二十年の歳月が過ぎ去ったが、あの頬の傷は間違いようがない。

土手の叢に座り込んだ伊太智は、いつまでも動かない。じっと川面を見つめる後姿が寂しげである。川風が冷たい。冷え切った佐留が痺れを切らせた頃、深い溜め息をついて、伊太智はようやく重い腰を上げた。堂々とした体格。硬く引き締まった筋肉。誰かに似ているような面差しおもぎに首を傾げながら、佐留は離れて後を追う。

（誰に似ているのだろうか。こんなに立派で凛々しい男が本当に皇子様方の死に関わっているのだろうか。そうか。誰かと思つたら、皇子様に似ているのだ。）

弓削が年をとつたらこんな感じになつたかもしれない。どこことなく高市にも似ている。

伊太智は大股でずんずん歩く。佐留の足ではついつい見失いがちになる。街中に入つても格別人目を気にする風でもない。都大路を突つ切つて香久山の方へ歩いて行く。やがてくぐりを抜けて入つて行つた大きな館。

（そうだったのか。どおりで。）

何もかも合点が行つた。館の主の名は、藤原不比等。

（大津様も、川島様も、そして弓削様も。全て藤大納言がやらせたのだ。いや、他にも不審な死に方をなさつた方はたくさんおられるぞ。）

塀の外で茫然と立ち尽くしていた佐留は、ふと背後に視線を感じて振り向いたまま、その場に凍り付いてしまった。くぐりに消えたはずのあの男が、門にもたれて笑っている。

（殺される。）

背筋に冷たいものが走つた。それでも恐怖より好奇心の方が先に立つ。殺される前にこれだけは聞いておきたい。

「なぜ皇子様方を殺め奉つたのだ。」

カラカラに乾いた喉からやつとの思いで声を絞り出す。

「知るものか。主の命令だ。俺は奴だ。」

「そんな奴がいるものか。まるで大王のようではないか。」

伊太智の顔が歪む。やがて自分でも驚くほど低い静かな声でしゃべりだした。

「さすがは詩人だ。よく気がついたな。俺の父は大友皇子だ。だが母は婢だ。婢の子は奴にされる。それが定めだ。兄弟が皆皇子だ、皇女だと威張っているのに、一人だけ奴にされて人殺しをやらされる俺の気持ちだが、お前にわかるか。」

初めて向き合ったこの老人に、溜まりに溜まった胸のうちの怒りをどうしてぶちまける気になつたのか自分でもわからない。頑なに世間に背を向けて生きてきた男にも、人に聞いてもらいたいという思いがあつたのか。一旦口にしてしまうとなぜか涙が溢れ出そうになる。伊太智は黙って門の中に姿を消した。

思いがけない伊太智の言葉に、返す言葉もない。佐留は金縛りにあったようにいつまでもその場から動くことができなかった。

(殺される。)

秘密を知った佐留を、不比等が見逃すわけがない。殺される前にやっておかねばならないことがある。『古事記』である。かつて浄御原宮大王の命で始められた正史編纂事業の基準となるように帝紀を整理し直したものである。編纂事業は大王の崩御と共に中断してしまった。だが、責任者だった川島は、大王の遺志を継いで独自に中断された事業を続けていた。川島の死で未完に終わったこの書は弓削を通して、佐留に託されている。

正史編纂事業は菟野の代になって再開されたが、菟野が大嶋に書かせた『天神賀詞』から見る限り、浄御原宮大王の意図とはかなり違うものになるうとしていくようだ。佐留としては大王の意向に添って書かれた『古事記』を何とかこのままの形で残したい。

「危ない。隠さねば。どこに。長皇子か。いや、不比等ならきつと探し出すだろう。では舍人皇子か。いや、あの皇子は不比等の言いなりだ。あの男から隠しおおせるものではない。そうだ。」

いきなり佐留は大切に取っておいた紙と筆を取り出すと、猛烈な勢いで『古事記』を写し出した。目が血走り、手が棒のように動かなくなった。それでも、佐留は写し続ける。食事を運んできた侍女は、物に憑かれた様な佐留の姿に恐れをなして、声もかけずに部屋から出て行った。三日三晩がたちまちに過ぎ去った。

「できた。」

佐留は資人を呼ぶと、写し終えたばかりの書を預けた。

「良いか。誰にも知れぬよう、これを、牟久売に直接手渡すのだ。」

牟久売から大伴安麻呂に届けさせよう。やはりいざと言う時に頼れるのは牟久売しかいない。佐留は無骨者の安麻呂が自分を嫌っていることを、百も承知している。親しい人では危ない。あの安麻呂なら不比等も思い及ぶまい。

これまで散々不比等に煮え湯を飲まされてきた大伴氏なら、いつの日か藤原氏の世が終わる時までこの書を隠してくれるだろう。

やがて佐留と吉備采女も捕えられ、共に近江に流された。すぐにも殺されるものと覚悟していた佐留である。近国への流罪は拍子抜けだった。

「あの男、俺に見られたことを不比等にしゃべっていないのかもしれない。」

吉備采女が湖に身を投げたと聞いたのはその後すぐである。自分が恋歌を代作した相手である。佐留は心が痛む。

楽浪の志賀津の子らが罷道の

川瀬の道を見ればさぶしも

(218)

紀を葬り去って、不比等の権力は、もはや動かし難いものとなった。その丸い顔に自信が満ち満ちているのを、作り笑いで隠す必要もなくなった。とらえどころのなかった忍壁も死んで、正史の編纂も思いのままになった。軽の血筋のみを神聖化し、その外戚としての藤原氏の地位を神代以来の約束事として永遠に絶対化する、それが狙いである。

だが三千代が言う。広麿に受けた背中への傷はまだ癒えていない。「そう言えば、あれはどうなったのでしょうかね。浄御原宮大王が作らせた史書があったはずですが。」

「浄御原宮大王が作らせた史書。中臣大嶋が書いていたものではないのか。」
「いえ。その前に正史編纂の基準になるようにと、大王様が大まかな骨組みを決められたのですよ。帝紀に佐留が集めた歌物語をくっつけたみたい簡単なものだって聞きましたけれど。あれは誰が持っているのでしょうかね。」

「正史編纂の資料の中に混じっているのではないか。」

「ええ、そうかもしれませんね。まだ出来上がっていないはずですから。大王様も亡くなられましたし、それっきりになってしまったのでしょうかね。そうそう。確か『古事記』とか言いましたが。」

『古事記』。そんなもの、資料の中にはなかったぞ。」

迂闊だった。不比等が政界に入ったのは浄御原宮大王の崩後だから、さすがの不比等も知らなかったのだ。そんなものが世に出ては、今書いている正史の偽りがばれてしまう。すぐにもこの世から葬り去らねばならない。

「佐留に聞けばわかるかもしれない。」

草壁の葬儀の時の佐留の姿が眼に浮かぶ。素直に菟野を神と讃える歌を歌い続けた佐留である。ただの歌詠みだ。問題はない。

「佐留はどうしているのです。」

「いい年をして、まだ恋歌の代作をしていたのだ。吉備采女が受け取った歌、あれは佐留の歌だ。今は近江にいるはずだ。」

「吉備采女は湖に身を投げたそうではありませんか。可哀想なことをしました。」

「男がいたのだ。采女のくせに。罪は贖わねばならぬ。」

「まあ、怖いこと。」

三千代は笑いながらその豊かな体を男に預ける。その怖い『律令』を作った頼もしい男。『律令』は支配する側に有利にできている。これがある限り、政敵は全て罪に陥れることができるのである。

「来たな。」

近江の配所で、朝廷からの突然の召還を受けた時、佐留はとっさに『古事記』のことを思った。『古事記』を家の中に丁寧^{おさかべのたりまろ}に隠すと、素知らぬ顔で都に向かう。途中、歌仲間の刑部垂麿^{ながのおきまろ}や長意吉麻呂^{ながのきまろ}らとも合流した。ひよっとしたら許されるのか。だが、同行の役人がやたら急がせるのはなぜか。都へ行っ

てこれからどうなるのか。不安が先立つ。垂麿が不安を打ち消すかのように歌を詠む。

馬ないたく打ちてな行きそ

日けならべて見てもわが行く志賀けにあらなくに (263)

琵琶湖が雨に煙って泣いている。一行は黙って歩を進める。

神埼の郡を過ぎる頃になると雨足が強くなってきた。意吉麻呂の歌。

苦しくも降り来る雨か

神みわの崎狭野きのの渡りわたに家もあらなくに (265)

夕暮れの湖畔に千鳥が鳴いている。昔ここを旅した時。あれは、菟野に召し出されて、得意の絶頂だった頃だ。それが今はどうだ。昔の人もどんな思いでこの湖を眺めていたのだろうか。佐留の涙は苦い。

淡海あふみの海夕波うみ千鳥な汝が鳴けば

情こころもしのに古思こしほゆ (266)

都へ行っても自分だけは許されることはあるまい。詩人の直感である。

もののふやの八十そちがは氏河あじろの網代木きに

いさよふ波の行く方へ知らずも (264)

佐留の帰京を楽しみにしていたのは志貴である。歌人が次々に流されて、宮廷歌壇は火が消えたように寂しい。だが、都に着いた佐留は再び捕らえられたという。垂麿や意吉麻呂が許されたのに、なぜ佐留は許されないのか。志貴にはわからない。何かある。その何かがわからないまま、志貴は忍び寄る黒い魔の手を歌に詠まずにいられない。

むささびは木末ゆれ求むと

あしひきの山やまの獵夫さつせにあひにけるかも (267)

予想通り、佐留は『古事記』の在り処を問われた。従順に見えた佐留が頑として口を割らない。政争の渦に巻き込まれて、流されるままに流れてきた老詩人の、最後の抵抗であった。思いがけない老人の抵抗は、普段の不比等の冷徹な目を狂わせた。関連の箇所が家探しされたあげく、『古事記』が遂に発見没収された時、不比等は自分の勝利を信じた。

やがて佐留の姿は都から消えた。だが、この時すでに『古事記』の写しが安麻呂の手に渡っていることを不比等は疑いもしない。